Collection
of
The World-Literature

魔の山 II 大公殿下 他

トーマス・マン

關泰祐 望月市惠 野島正城譯

世界
文學
全集

17

河出書房

世界文學全集（第一期）17

トーマス・マン
魔の山 II
大公殿下

昭和三十二年一月三十日　十四版發行
定價　三百八拾五圓
地方定價　三百九拾圓

譯者　關泰祐
望月市惠
野島正城

東京都千代田區神田小川町三ノ八
發行者　河出孝雄

東京都新宿區市ケ谷臺町一
印刷者　草刈親雄

東京都千代田區神田小川町三ノ八
發行所　株式會社　河出書房
電話　東京（29）三七二一—五番
振替口座　東京一〇八〇二

印刷・製本：中央製本印刷株式會社

目次

解説……一

魔の山（つづき）

第七章……七

海濱の散歩……七

ペーペルコルン氏（メネール・ペーペルコルン）……一一

vingt et un（トゥエンティー・ワン）……一七

メネール・ペーペルコルン（つづき）……三〇

メネール・ペーペルコルン（むすび）……五九

無感覺と呼ぶ悪魔……六八

樂音の泉……七五

ひどく胡散なこと……八七

ヒステリー蔓延……一〇七

晴天の霹靂……一二四

小男フリーデマン氏……一三一
マリオと魔術師……一四九
大公殿下
プロローグ……一八三
障害……一八四
領土……一九六
靴屋の親方ヒンネルケ……二〇三
ドクトル・ユーバーバイン……二一七
アルブレヒト二世……二四一
高位の職……二六一
インマ……二七三
成就……二二九
バラの樹……二六三
年譜……三七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解　説

――作品について――

『小男フリーデマン氏』ハンザ同盟の自由都市リューベックに百年以上もつづいた穀物問屋であったマンの一家は、トーマス・マンが十五歳のとき父が死んでからはこの舊家も沒落して、『ブッデンブローク家の人々』に出てくるマン家の由緒ある家屋敷も人手にわたり、トーマス・マンはリューベックの實科高等學校をおえるのを待つようにして、母たちがすでに移っていたミュンヘンへと出てきて、ある火災保險會社の無給の見習員の仕事をはじめた。その仕事というのは明細書のコピイをとることであったが、マンはこの無味乾燥な事務を行いながら、机の下で短篇小説を書きすすめていた。このときに書いた『ゲファレン』（『好意』というほどの意味であろう。）がマンの小説における處女作といわれるが、これは作品集には收められていない。やがてマンはこの見習の會社勤めを一年たらずでやめて、ジャーナリストになりたい希望で、ミュンヘンの大學に聽講生としてはいった。といっても、むろん、講義第一にまじめに大學へ通う學生ではなくて、前記『ゲファレン』ですでしは尊敬されてもいた彼は、文學志望者や藝術家連がたむろする喫茶店にとぐろをまき、新人たちとつきあい、いわゆる文學青年の大學生活を送っていたのだった。ジャーナリスト志望であり、作家志望でもあるこの文學青年は、こつこつと短篇を書きためていった。『小男フリーデマン氏』はこのころ二十二歳で書いた作で、ほぼ同時期の『幻滅』『幸福への意志』『道化者』などの短篇といっしょに、『小男フリーデマン氏』の題名の短篇集として出版された。イタリアで繪の修業をしていた兄のハインリヒの誘いに應じて、トーマス・マンはイタリアにおもむいたので、彼はこの地で處女作短篇集を手にしたのだった。

『小男フリーデマン氏』は、マンの長い作家生活でさいしょの位置を占めるこの短篇集のなかでも、代表的な作品である。十九世紀の自然主義の名殘りが認められぬでもないが、いっさいの冗漫な紛飾を拭いさった冷嚴といいうる文體でもって、不具な哀れな人間、なにかまともでない人物、そして、人生にたいして誠實であろうとしながらも、運命とも見られる力によって破滅の淵へと引きずりこまれる人間の純粹さを描き出している。このフリーデマンという、宿命を背負わされた男の痛ましい體驗は、まだ白面の一青年にすぎなかったマンの、苦惱と生きるための誠實とを示すものにほかならぬであろう。トーマス・マンは何よりもまず自己を誠實に語る作家であるが、彼は創作の第一歩を、自己の苦惱をひめたこの作品あたりから踏みだしたのである。

『マリオと魔術師』マンは四十九歳で『魔の山』を完成してからは、創作はあまり發表しないで、おもに文學論、時代と文化への批評を執筆して、擡頭しつつあるファシズムと戰いながら、ヒューマニストとしての立場を主張しつづけてきた。そして一方では、作品としては長篇『ヨーゼフとその兄弟たち』の筆をすすめていたのだったが、この『マリオと魔術師』は、この長篇執筆の合間に書かれたものであった。マンの一家は、夏は海岸ですごす慣わしだった。一九二九年の夏、この作が發表された前年の夏には、バルト海地方のラウシェンという海水浴場でひと夏をおくった。海水浴客でごったがえす海濱にトーマス・マンは椅子をすえて、この海邊の情景を、以前イタリアのフォルテ・ディ・マルミ

イの海岸ですごしたときのイメージに重ねながら、書いていったのがこの作品である。

シーズンも終りに近づいた國際的な海水浴場に、チポルラという催眠術師があらわれるが、この男のいかさま演戯と、それを見物する、あるいは、その術にかけられる觀客とのあいだの微妙なやりとりや、奇妙な雰圍氣をたくみに寫しだしている。ことに、チポルラの人物描寫はいきいきとした生彩をおびて、フロイト研究家であるマンの、潛在意識、意識下にひそむもの、夢と現實との交錯などの觀察や解剖が、傍觀者の立場で、客觀的な筆であざやかに浮彫りにされる。このチポルラと觀客との關係は、藝術と生、藝術家と大衆との關係をあらわしていて、藝術家はひとびとを夢幻の境に遊ばせ、樂しませるが、藝術家自身はもしそのとき大衆を欺くならば、身を滅ぼさねばならぬという主題を扱ったともいわれるし、また、あたかもナチスが支配を振いはじめるこの時期に、ちょうど催眠術をかけるように國民を動かすファシズムの心理を衝いたものともいわれる。それはそれとして、わたしは、この作品の緻密な構成を心にとめながら、精密でしかもユーモラスな情景と人物の描寫をたのしむのが、この作品をもっともよく味わうことだとおもう。その點では、この作はマンの作品のうちで異色ある作であり、藝術的には完璧にちかい短篇といってよい。

『**大公殿下**』この長篇小説は一九〇九年、マンの三十四歳のときの作である。『ブッデンブローク家の人々』で一躍文名を馳せて、おしもおされぬ世界的な作家になったマンは、この作の四年前、一九〇五年に大學の數學教授プリングスハイムの娘カーチャと結婚した。華やかな藝術的雰圍氣をもったプリングスハイム家の娘との結婚は、このカーチャへの情熱を人前でかくすことはしなかったと『自傳』に書いているように、マンの生活にあたらしい幸福への道をひらいたものであった。この『大公殿下』はこの新生活から生まれたものである。だが、この作が發表されたときには、批評家たちは、いままでは暗い陰影にとむ個人的領域からは踏みださなかったマンが、たとえあらたな生活に根ざしているとはいえ、幸福な結末に結ばれるこの王朝の物語が、作者の内生活にどのような關聯があるのかと、首をかしげたのだった。それでも、これまでとは作風を異にして、暗さというものを少しも持たぬこの作も、やはり、マンの内的な生活につながっている。

「詩人とはいかなる人間か。そのひとの生活が象徴的な人間のことである。わたしの胸には、自分のことを語りさえすれば、それが同時に、時代の一般にものをいわせることになるという信念が宿っている。もしこの信念がなかったなら、わたしは創作の勞苦を免れることができたであろう。『大公殿下』は、わたしの名人氣質が凝り性を發揮したが、これは不案内なものであるゆえに要求する權利がないというような、自分勝手にえらんだ材料なのではない。むしろ、ドイツの小説を藝術形式として高め、高貴にしようとする少數のひとたちの努力に、自分も力相應にくわわることによって、わたしはこのたびも、自分の生活について物語ったのだ」とマンは、『大公殿下について』という短いエッセイのなかでいっている。主人公のクラウス・ハインリヒ、彼と結ばれる千萬長者の娘インマ、高貴なアルプレヒト、妹ディートリンデ、いずれも、作者の内生活に根をおろす人物なのである。

しかし、幸福をあつかったこの作品には、マンの文學での一發展、もしくは轉換といえるものを窺うことができる。『ブッデンブローク家の人々』から『トニオ・クレーガー』にいたる作は、個人の生活そのものを語り、それはよい意味での個人主義の文學

であった。ところが、この『大公殿下』では社會、あるいは共同體がはじめて取りあげられ、個人主義的であったマンの創作の方向がここで止揚されたわけではないにしても、とにかく、マンがその得た新生活の幸福を、個人の幸福で終らせることなく、それを共同體の幸福へと押しすすめようとしたのだった。マンはその事情を、『略傳』につぎのように説明している。「ひとりの若い夫がここでは、孤獨と共同生活、形式と生活とを綜合する可能性について、また、貴族的で憂鬱な意識と、當時すでにデモクラシーというかたちで呼べば呼べるであろうような、新しいもろもろの要求との融合について、ひとつの寓話を作ったのである。このなかのユーモラスな想像は自傳的な、氣分的な性質をおびていて、直接的で傾向的な告知のようなものはすべて除外したのだが、この喜劇はしかし嚴肅なものを持っており、このなかにあるほとんど政治的ともいえるさまざまな暗示は、それを一九〇五年のドイツから取ってきたことを、わたしは認めたいとおもう。」この作品には個人主義の危機、共同、愛への作者の轉換が象徴的に描かれている。負債で首がまわらぬ、この没落に瀕した公國も、二度にわたって敗戰を經驗したドイツを、すでにその以前に描いたと見られるかもしれない。そうだとすれば、マンの時代感覺の鋭さをあらわしているのではあるまいか。この一公國の有様は、いまの日本にも似通ったところがあるともいえるであろう。

貧乏國の片手の王子クラウス・ハインリヒとインマ・スペールマンは結ばれて、クラウスは高貴な生まれのゆえの孤獨から、インマは富と血統のゆえの孤獨から救われて、公共的な意味をもつ新しい人生への一歩を踏みだしていく。クラウス・ハインリヒは、他人の言葉をそのまま取りいれる平凡な人間だが、しかし、惡というものは全然持たず、誠實であるために謙虚であり、謙虚であるために誠實であって、片手が萎縮している負い目がありながら、すこしの暗さというものもない。インマは特殊な境遇のために世間からは遠ざかり、皮肉と冷たい領域のなかにたてこもる孤獨の女性である。クラウス・ハインリヒは、自分の持たぬこのインマの強い個性にひかれて、インマの信頼を得ようと苦しい戰いをはじめて、乗馬での散策のおりや、邸宅での樂しいお茶の時間に、ふたりの感情のもつれは解きがたいほどになるが、クラウス・ハインリヒの人物が生長し發展してはじめて、インマの信頼を得て、そこに愛が芽ばえ、幸福な結末へとたどりつく。主人公の精神的な發展を主題にするドイツ小説の特徴を、この作品もそなえているのである。

副人物であるクラウス・ハインリヒの師傅ドクトル・ユーバーバインは、低俗な生活を輕蔑し、ヒューマニズムをも否定する、英雄主義的な觀念でもって、クラウス・ハインリヒに「必要以上」の影響をあたえる。一方、インマの「話相手」のレーヴェンジュール伯爵夫人は、不幸な結婚の體驗のゆえに、すべての男性と女性を見る眼が一方的に偏してしまい、性の問題を「管理する」と妄想する異常心理の持主で、この夫人はまたインマに、男性への漠とした不信を植えつけたように見える。クラウス・ハインリヒの兄、大公アルプレヒトは作中でもっとも高貴な人物として描かれ、その鋭くしてもろい、氣高いすがたは、トーマス・マンが取りあげる市民精神にたいする藝術家精神をうちに祕めた、象徴的な人物である。それから、マルティーニという詩人が、顔を出すが、この詩人がいささかピントの合わぬクラウス・ハインリヒとかわす會話、文學とはどのようなところから生まれてくるか、それは生活の享受にたいする諦めと憧れから生ずると語るマルティーニの言葉は、文學にたいするマンの見方をあらわすものとして

興味の深いものがある。そのマルティーニのいうことは、クラウス・ハインリヒには十分の納得ができず、クラウスがその後に妹にむかって、これにはなにかいやらしいところがあるというのも、マンという作家を知るうえで重要な點であろう。

物語の舞臺にされるドイツのどこかにある大公國、それはまことに貧弱な國であり、經濟狀態はほとんど壞滅に瀕したありさまだが、住民は淳朴なだけで何の才能もなく、ほとんど愚直といってよいほどに素朴だが、大公家と國家にたいしては忠實であり、もし彼らの生活がもっと惠まれるならば、彼らは幸福になることができるのだ。この國の發展、つまりこの物語の進展は、精緻な頭腦をもち、ユーモアを失わぬクノーベルスドルフただひとりによって運ばれていく。この公國は現實にはどこにもないであろう。しかし、それはまたどこにも、あるいは、どこかにあるであろう。マンのこの國情の描寫は、あたかもセレモニーの式典長のように精密をきわめているが、この貧困ぶり、經濟の微にいり細をうがった環境描寫は、人物と物語の筋に現實味をあたえるためには作者として缺くことのできぬものであり、この精細な描寫によって、たとえば、クラウス・ハインリヒの「片手の王子」という設定も、かびの匂いのする美しいバラについての言い傳えも、はじめて眞實味をおびてくるのである。そして、このマンの筆の運びには、陰鬱なかげはどこにもなく、ユーモアと、機智と、皮肉にあふれていて、マンの作品系列のなかで、この點からもあらたに見直されてよい作品である。

野島正城

Der Zauberberg

魔の山

II

關泰祐
望月市惠
譯

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第七章

海濱の散歩

私たちは時を――時そのものを、時自體を、それだけを切りはなして話すことができるだろうか？　いな、それは不可能である！　氣違いじみた試みというべきである！「時は過ぎた、時は流れた、時は移った」と、こんなようにいつまでもつづく物語を、正氣で物語と呼ぶ者は誰もないであろう。これは同一の音か和音かを夢中で一時間も鳴らしつづけて、それを音樂だと稱するようなものである。物語は時に内容を與える點で音樂に似ている。故人ヨーアヒムが生前なにかの機會にもらした言葉を引用するならば、時を「ちゃんと填めてくれ」、時を「分割し」、いつも「内容を持たせ」、常に「何かが起こっている」ようにする點で、音樂に似ている。どれもずっと前に言われた言葉であって、讀者が果してどのくらい前であったかをはっきり覺えているかどうかも怪しいものであるが、私たちは物故した人々の言葉を偲ぶあの敬虔な悲しみの情をもって、ここにその言葉を引用するのである。時は生活の要素であると同樣にまた物語の要素でもあって、空間中の物體に結合しているように物語にも緊密に結合している。時はまた音樂の要素でもある。音樂は時を計量し、分割し、時を短かくもし貴重なものにもする。この點からして音樂はさっきも言ったように物語に似ている。物語もまた――造形美術の作品が一度にはっきりと眼にせまって、單に物體という性質から時に結合しているのとはちがって――前後の關係、言い換えると經過的現象としてのみ存在するのであって、どんな瞬間にもまとまった全體的な形を取ろうとするにしても、物語として甦えるためにはやはり時の要素を必要とするのである。

これは明瞭なことである。しかし音樂と物語とには相違點があることも明らかである。音樂における時間的要素は一元的である。即ち音樂は地上における經驗的時間の一小部分を區切り、それをうずめ、それを名狀しがたいほど高貴な美しいものにするのである。これに反して物語の時間的要素は二元的である。一つは物語自身に要する時間、即ち物語の經過と再現とに必要な純粋な音樂的時間と、もう一つは物語の中に含まれている内容的時間とに分れるのである。後者は融通性に富み、しかもその融通性は一樣ではなくて、音樂的時間と殆ど、いな、完全に一致する場合もあれば、またその開きが比較にならないほどに大きい場合もある。「五分間ワルツ」と呼ばれる音樂は五分間つづく音樂であって、時に對するこの音樂の關係はそれだけに盡きている。ところが五分間の出來ごとを物語る物語は、その五分間の内容をつとめて良心的に物語るとしたら、五分間の千倍もの時間を必要とし、内容の五分間にくらべて恐ろしく長くなるわけであるが、しかも非常に短かく感じさせることも可能である。そうかと思うとまた、物語の内容的時間が、物語るに必要な時間よりも恐ろしく長くて、それを短かく感じさせる場合もある。「短かく感じさせる」と言ったのは、この場合に明らかに作用する或る幻惑的な要素、あからさまに言うと、病的な要素を暗示したいからである。即ちこういう場合に物語は錬金術的な魔法、時間的な魔術を用いるのであって、この魔術は私たちが現實界において經驗する或る病的な場合、明らかに超感覺的世界に屬する場合を思い出させる。阿片常飲者の手記を讀むと、かれらは阿片に醉っている短かい時間中にさまざまな幻覺に襲われるが、この幻覺の内容は十年、三十年、或いは六十年もの久しきにわたったり、人間が經驗し得る時間の限界を踏み出すこともあると報告している。つまり、幻覺者の夢の内容的時間量は夢を見ていた實際の時間量を遙かに凌駕するのが常であって、時間感得の極端な短縮作用が行われ、麻醉劑ハシーシの或る常飲者が言ったように、麻痺した人間の腦の中で「時計がこわれてゼンマイが切れたように」何かが切れて、さまざまな想念が眼まぐるしいほどに犇き合うのである。

この阿片常飲者の不道德な幻覺の場合と同じように、物語も時を加減したり、取り扱ったりすることができる。物語が時を「取り扱う」ことができる以上、物語の要素である時が物語の對象にもなり得ることは明らかである。「時を物語る」ことができると言うのは、少し言いす

ぎかも知れないが、時について話そうとすることは、初めに感じられたほど不合理なことではないにちがいない――そうだとすると「時の小説」という名稱には、變に夢幻的な二通りの意味が含まれてくることになるわけである。さて、私たちは時を物語ることができるかという問題を提起したが、これは今私たちが話している物語の中で實際そういう事をもくろんでいることを、告白したかったからに他ならない。私たちは更にまた、今は故人になった謹嚴なヨーアヒムが音樂と時とについて例の言葉を口にしたのは（本來そういう種類の事柄を口にするような性質ではなかったのに、謹嚴なヨーアヒムがそれを口にしたのは、彼の爲人が或る程度まで錬金術的高揚を經驗した證據であった）、どのくらい前のことであったか、讀者諸君は今でもはっきり覺えておられるかどうかと訊いたが、讀者が、今ではもうはっきりしないと答えたとしても、私たちはあまり腹だたしくないであろう。腹だたしく感じないのみか、むしろそれを滿足にすら思うであろう。理由は簡單である。つまり讀者のすべてが私たちの主人公ハンス・カストルプの體驗をお相伴されることこそ私たちにとって大切であり、しかもそのハンス・カストルプが問題の點については全く自信がなく、もうずっと前から分らなくなっていたからである。そしてこれは二樣の意味で「時の小説」である彼の物語に當然なことである。

ヨーアヒムは勝手に低地へ歸るまでにこの上で一體ハンス・カストルプとどのくらい一緒に暮らしたか、もしくは全體でどのくらい暮らしたか、彼の反抗的な出發は暦の上でいつごろのことであったか、彼はどのくらいここを留守にしたか、いつまた彼はここへ戻って來たか、そして彼が戻って來てからついに時間の世界から消え去った時にハンス・カストルプ自身はここにもうどのくらいいたか……ヨーアヒムのことは問題にしないとすれば、それではショーシャ夫人はどのくらい留守であったか、そして彼女はいつごろ、例えば西暦何年にまた戻って來たか（彼女は實際またここへ戻って來ていた）、そして彼女が歸って來た時にハンス・カストルプは《ベルクホーフ》で何年暮らしたか、――そんなことを尋ねる者は誰もいなかったし、ハンス・カストルプ自身もそんなことを考えるのがいやで考えなかったが、誰かにそれを尋ねられたとしても、彼は指先で額をこつこつ打つばかりで、はっきりと返答することができなかったであろう。これは彼がここへ來た初めての晩にゼテムブリーニに年齢を聞かれて、すぐにそれを思い出せなかったのと同じ意味で氣がかりな現象であったが、あの時の迂闊さがこのごろはいっそう甚しくなっていた。彼は自分が今いくつになるのか、本當に分らなくなっていた！

これは奇異に聞こえるかも知れない。しかし例がないこととか有りそうにもないこととかいうのでは決してなくて、むしろ或る條件の下にあっては私たちの誰にでも起こり得る事柄である。そういう條件の下では、時間の經過が全く分らなくなり、從って自分の年齢も全く分らなくなることは避けがたい。こういう事になるというのも、つまりは私たちの内部に時間を感得する器官が缺けているからであって、外部に頼らないで自分の力だけで、ほぼ正確に近い程度ででも時間の經過をはかる能力が全くないからである。坑内に生き埋めにされて、晝と夜の交替を全然觀察できなくなった坑夫たちは、奇蹟的に救い出されてから、暗闇の中で希望と絶望との間に過ごした日數を、例えば三日と概算するとしよう。ところが實際はそれが十日であったりする。切迫した境地にあるのだからさぞ時間が長く感じられただろうと考えられるかも知れないが、事實は、坑夫たちにとって時間は實際の量の三分の一弱に短縮してしまったのである。これによって考えると、時間感得の器官を持たない私たちは、時間を曖昧にする條件の下にあっては時間を實際よりも長く感じないで、むしろ非常に短かく感じる傾向があるらしい。

ハンス・カストルプもその氣にさえなれば、そう苦勞しなくても計算によってこの曖昧模糊とした狀態から脱することができたであろう。これは勿論誰も否定しないであろう。讀者も曖昧模糊とした事が健康な趣味に合わないとならば、それほど苦勞しなくても、それをはっきりさせることができるであろう。ハンス・カストルプについていうと、彼は曖昧にしておくことが別にそういい氣持だったというわけではなかったが、そうかといって曖昧模糊とした狀態を脱して、この上でもう幾歳になったかを分ろうともしなかった。はっきりさせるのが悼られた

のは、良心に責められそうだったからであった――もっとも、時間に注意しないことこそ、最も惡質な無良心にちがいなかったが。

彼のこういう意志薄弱――故意とまではいわないまでも――を助長するのに、四圍の狀況が非常に適していたということが、彼のために言い譯になるかどうか私たちは知らない。ショーシャ夫人が戻って來た時は（ハンス・カストルプが豫期したとは違う戻り方であって、そのことについてはいずれその所で述べよう）再び降臨祭の季節であって、晝の最も短かい日、つまり曆の上で冬の初めがまた近づきつつあった。しかし天文學的な配置を暫く措いて實際について見ると、雪の點からも寒さの點からも、もういつごろからといえないくらい前から冬になっていた。いや、もうずっと前から冬ばかりがつづいていて、時々ほんの少し夏めいた日が挾まるだけであった。この夏めいた日には、空が殆ど黑味を帶びるくらい青くて、眩しかった。もっともそういう日には、雪さえ無視すれば、冬の季節にも訪れたし、それに雪は夏のどの月にも降った。ハンス・カストルプは亡きヨーアヒムとこのひどい混亂について何度お喋りをしたことであろう！　この混亂は四季を混合し、ごちゃまぜにし、季節の順序をなくし、一年を長いようで短かく、短かいようで長く感じさせ、ヨーアヒムがかつて不愉快そうに口にしたように、時をただ名ばかりにしてしまった。この大混亂によって混亂、混合させられたところのものは、實は「依然として」と「またもや」という氣分的區別、もしくは意識狀態であった。實に面くらわせる、變ちきりんな、奇妙な經驗の一つであったが、ハンス・カストルプはこの上で最初の日からそれを經驗することに不謹慎な快感を覺えたのであった。彼がこの種の混亂の比較的まだ輕いのに初めて襲われたのは、柱に輕快な縞模樣のある食堂で一日五回の分量の多い食事をした時であった。

あの最初の時よりも感覺と精神の混亂はずっと程度がひどくなっていた。時は個人の主觀的な時間感得が消耗し消滅した場合にも作用し、變化を「生じさせる」ところをみると、客觀的な實在性を持っている。臺所の壁の棚に密封してならべられている食料品が時の影響を受けないかどうか、これは職業思想家の問題であって、從ってハンス・カストルプがそれをいつか云々したのは、青年の客氣からであった。時が何年も眠りつづける者にも作用することは、私たちも知っているとおりである。或る醫者は十二歲の少女が或る日から眠り始めて十三年間眠りつづけた實例を語っているが、その少女は十二歲の少女のままではいなくて、睡眠中に一人前の女に成熟していたそうである。これは當然そうあるべきである。死人は死んでしまったのであって、時に永遠に左樣ならをしてしまったのであるから、時間にくよくよする必要がない。言い換えると、死者自身にとっては時はないわけであるが、それにもかかわらず死者にもやはり爪も延びれば髮も延びるし、とにかく――しかし止そう、ヨーアヒムがいつかそのことについて云々して、ハンス・カストルプに低地人らしい横槍を入れられた書生っぽい文句を繰り返すのは。ハンス、カストルプにも髮と爪とが延びた。延び方が人一倍早いらしく、たびたび彼は村の大通りの理髮店の椅子に白い布をかけられて腰かけ、耳にまた被さり始めた髮を刈ってもらった。彼は本當はその椅子に腰かけとおしであったともいえた。或いはむしろ、彼がそこへ腰かけてお世辭のいい腕達者な職人に時の經過によって延びた髮を刈らせながらお喋りをしている時に、または自室のバルコニーの戸口に立ちながら天鵞絨の化粧袋から取り出した小鋏と鑢とで爪を切っている時に、急に例の混亂に襲われて、好奇的な興味のまじった驚きに似た氣持を覺えたと言った方がいいかも知れない。字義どおり眩暈とも幻覺ともつかない二通りの意味での混亂、つまり、「依然として」と「またもや」（この二つがごっちゃに混合してしまうと、時のない永遠になるのである）とが混亂して區別しがたい狀態であった。

たびたび斷言したように、私たちはハンス・カストルプを實際以上に見せようとも考えなければ、また實際以下に見せようとも思わない。だから彼がそういう神祕めいた誘惑に不謹慎な喜びを覺え、自分から意識的にそういう誘惑を求めたとしても、彼がまたそれとは反對の努力によってそのつぐないをしようとしていたことを、私たちは默っていないことにしよう。彼は時計を手にして坐ることがあった――平ったく滑っこい金側時計の、名前の頭字を彫った蓋を

開けて。そして陶製の文字板の上を見下ろしていた。文字板の上には黑と赤のアラビア數字が二列にぐるっと並んでいて、纖細な華麗な飾りがついた二本の金の針がそれぞれ反對の方向を指し、細い秒針は受け持ちの小さい圓の廻わりを忙しそうにチクタク廻わっていた。ハンス・カストルプはその秒針をじっと見つめながら、時の歩みを二、三分間引きとめ、引きのばし、時の尻尾をつかもうとした。しかし小さな秒針はチクタクと前進しつづけ、次ぎ次ぎと辿りついた數字には目もくれないで、それに觸れただけで、それを乘り越え、あとにし、遙かあとにし、それからまたそれに近づき、再びそれへ辿りついた。針は到着點、區分、目盛に無關心であった。60の數字の所で一瞬休息するとか、これで一仕事すんだというちょっとした合圖ぐらいはしてもよさそうなものだったが、針は60の數字をも他の無標の目盛なみに通り過ぎてしまった。その樣子を見ていると、數字も目盛も、すべて針の下にならべられているにすぎなくて、針はそれにはかまわずに、前進また前進するだけであることが分った。……それでハンス・カストルプは時計を再びチョッキのポケットへ收めて、時が前進するにまかせた。

この若い冒險家の內面生活に起こった變化を謹直な低地の人に分らせるには、どう說明したらいいだろうか？　眼がくらくらするような無差別の度が增したのであった。少し大まかに見ると今日の現在とそれに瓜二つの昨日の、一昨日の、一昨々日の現在とを區別するのが容易でなかったが、その現在はまた一月前の現在、一年前の現在とも區別がつかなくなり、模糊とした永遠の現在にもなりがちであった。しかし「依然として」と「またもや」と「やがて」という健康な意識的區別が殘っている場合には、私たちが「今日」を過去と未來とからはっきり區別するために使用している「昨日」と「明日」という相對的名稱の意味を擴大して、もっと廣大な相對關係に適用したい誘惑が感じられた。極めて小さい時間單位によって生きていて、その短い生涯にくらべると私たちの秒針の小刻みなチクタクも時針の氣長な緩慢な動きと同じほど緩慢に感じられるような生物が、小さい遊星にでも住んではいないかと空想することは、困難ではないであろう。またその反對に、次ぎのような生物も想像できなくはない、卽ちその生物の空間には途方もなく大きい步幅の時間が結びついていて、「たった今」と「少し後」とか、「昨日」と「明日」とかいう差別概念は、かれらの時間感得にとって途方もない大がかりな擴がりを持っているというような。私たちに言わせると、そういう空想は可能であるばかりでなく、大まかな相對主義の精神からいっても、また「所變れば品變る」の諺からいっても、正當な健康な立派な空想といわなくてはならない。しかし一日とか一週間とか一カ月とか一學期とかいう時間が重大な意義を持つのが當り前であって、そういう時間單位が生活にさまざまな變化や進步をもたらす年齡にある人間が、「一年前」と言うかわりに「昨日」と言い、「一年後」と言うかわりに「明日」と言うような放縱な習慣に或る日そまってしまうか、或いは時々そんな誘惑に負けるとしたら、私たちはその若者を一體どう考えたらよかろうか？　それに對しては「迷誤と混亂」という批評が明らかに當っていて、從って大いに憂慮すべき傾向である。

時空の區分が混亂し消滅してしまって、眼まいがするほど無差別になるのが常例でもあり自然でもあって、從って休暇中その魔法にかかっても大目に見られるような境涯と風景的環境とが世にはあるものである。——私たちが言おうとしているような場合に「風景」という言い方ができるとしたらである。私たちは海濱の散步のことを言おうとしている。これはハンス・カストルプが思い出すたびに烈しい愛情を禁じ得ない境涯であって、彼が雪中を彷徨した時に故郷の砂丘の姿をなつかしい嬉しい氣持で思い出したことは、私たちもすでに知っているとおりである。そして私たちが海濱のあの素晴しい渺茫とした情景を引き合いに出したら、讀者も自分の經驗や記憶から、それを思い出して下さるだろうと信じる。君は海濱を步きに步く……君は時間から離れてしまい、時間も君から離れてしまって、君はこの散步からちゃんとした時刻に家へ歸ることができないであろう。ああ、海、私たちは今お前から遠く離れた所に坐って、物語りながらお前のことを考え、お前をなつかしんでいる。私たちはお前に大聲で呼びかけて、私たちのこの物語の中でお前に大きく息づいて

もらいたいのだ。これまでもこの物語の中に絶えずひそやかに息づいていたし、今も息づいており、これからも息づくだろうように。……ざわめく海原の上には薄青い灰白色の空がひろがり、鋭い濕氣があたりに充ち、私たちの唇にもその鹽っぽい味が移る。おだやかな風がひろびろと自由にのびやかになごやかに空間を吹きわたり、私たちはその風に耳をつつまれ、頭をぼんやりされながら、海藻と小さな貝殻とが散らばった彈力のある砂の上を歩きに歩く。私たちはいつまでも歩きつづけ、寄せてはかえす白波が私たちの足を洗おうとするのを見る。波は碎けては泡立ち、空ろな明るい音を立てながら擾ねかえり、平らな濱邊に白絹のように打ち寄せる——ここでもかしこでも、あの向うの砂洲でも。そしてこの到るところで思い思いにのんびりとざわめいている波の音は、私たちの耳から世のすべての音を消してしまう。深いみちたりた氣持、意識せる忘却……私たちは永遠の懷ろに抱かれて眼を閉じよう！　いや、御覽、あの白波のさわぐ灰綠色の沖がすぐそこのように地平線に溶けこんでいるあそこに、白帆が一つ見える。あそこに？　あそこってどういうあそこだろう？　どれくらい遠いのだろう？　どれくらい近いのだろう？　それは君にも分らない。君は頭がくらくらするほどその判斷に迷う。あの船が濱邊からどれくらい離れているかを知るには、君はあの船自身が一つの物體としてどれくらい大きいかを知らなくてはならないだろう。小さくて近いのだろうか、大きくて遠いのだろうか？　君の眼はいつしかぼんやりしてくる。君自身に空間をはかる器官も感覺もないからだ……。君はいつまでも歩きつづける、——もうどのくらいの時間を歩いたろう？　どれくらいの距離を歩いたろう？　それは分らない。私たちがどんなに歩きつづけても、何一つ變ろうとはしない。あそこはここと同じであるし、さっきは今と、これからと同じである。渺茫とした單調な空間の中では時間も消滅してしまう。どこもかしこも變らない天地にあっては、一點から一點への運動は運動でなくなり、運動が運動でなくなれば、時もなくなる。

中世の學者たちは、時間は錯覺であって、因果關係と連續とによる時間の經過は私たちの感覺の或る機構の結果であり、事物の眞の姿は足ぶみする現在であると教えた。こういう考えを最初にいだいた學者は、永遠のほのかな鹹味を唇に味わいながら海邊を散歩した人ではなかったろうか？　とにかく私たちは繰り返して言うが、私たちが今言ったことは休暇中の特典、餘暇中の空想であって、良心的な人間はそういう空想にはすぐに飽き飽きしてしまうであろう——ちょうど活動的な人間が溫かい砂の中に埋まって寢ているのにすぐ飽きてしまうように。理性が越えてはならない限界、それを越えると理性本來の使命を等閑にする結果になる限界、それを理性に示すためならばとにかく、それ以外の目的のために人間の認識方法と形式とを批判して、その絶對妥當性を疑わせることは、不條理で破廉恥で裏切りであろう。ゼテムブリーニ氏は私たちが興味をもって物語っている運命の主人公、卽ち氏が折にふれて麗わしく「人生の厄介息子」と呼んだハンス・カストルプ青年に向って、教育者らしいきっぱりした口調で形而上學を「惡」と斷定したが、私たちはそういうゼテムブリーニ氏に感謝すべきであるかも知れない。そして私たちは、批評原理の意味、目的、目標はただ一つ、卽ち義務の觀念と生の命令以外にはあり得ないし、またあってはならない、と斷言することをもって、私たちの愛する故人ヨーアヒムに對する最もよき手向草としたい。さよう、私たちの生活を指導する叡智は、理性の限界を批判し制限して、その限界線へ生の旗標を樹て、その旗の下で生の勤務に服することを私たち人間の軍隊的義務であると聲明した。私たちは單人ヨーアヒムが憂鬱症の饒舌家ベーレンスのいわゆる「糞勉强」のために死期を早める結果になったことも、ハンス・カストルプ青年の時間觀念を餘計に崩れさせ、永遠との戯れを餘計に激化したと想像して、情狀酌量すべきであろうか？

ペーペルコルン氏（メネール・ペーペルコルン）

「國際」という看板に僞りがないサナトリウム《ベルクホーフ》に、メネール・ペーペルコルンと呼ばれるかなり年輩のオランダ人が暫く逗留していた。このペーペルコルンはジャバでコーヒー栽培をやっていた植民地オランダ人であったが、そういういくらか有色人種めいた感じだ

けでは、私たちも彼ピーター・ペーペルコルンを（というのが彼の名前であって、彼は自分をそう呼んでいて、「今ピーター・ペーペルコルンはブランデーで英氣を養っておる」というのが彼の口癖であった）この物語の幕切れ近くになってから登場させようとは思わないであろう。ドクトル・ベーレンス顧問官がいくつもの國の言葉で慣用句めいた駄辯を弄しながら院長をつとめている模範的サナトリウム《ベルクホーフ》には、いやはや、なんとさまざまな毛色の客たちが止宿していたことであろう！　このごろもここには或るエジプトの王女さえもおられた。顧問官にいつか珍しいコーヒー・セットとスフィンクス標の卷煙草とを賜わった王女であるが、彼女はニコチンで黄色く染まった指にいくつも指輪をはめていて、髪を短く斷髪しているセンセーショナルな女性であった。一日の主要な食事にはパリどのみの衣裳を着て現われたが、その他はいつも男の背廣服を着て、筋目をつけたズボンをはいて歩きまわっていた。パラヴァント檢事はこの王女様に夢中になって、ために數學も手につかず、氣がちがうほど逆せていたが、王女は男という男には眼もくれず、ただランダウエル夫人とのみ呼ばれている或るルーマニアのユダヤ婦人ひとりにのんびりと烈しい愛情を捧げていた。さてこの王女だけではまだ平凡すぎでもするように、王女様の小人數の護衛の中には去勢した黑人すら一人いた。この病弱な黑人は、カロリーネ・シュテールがたびたび當てこすったように男性として不具者ではあったが、しかも人一倍生に愛著しているらしかったから、その眞黑い身體をレントゲン光線で透視してつくられた體内寫眞を見せられて、快々としていた……

これらの人物にくらべたら、メネール・ペーペルコルンは殆ど特色なく感じられたであろう。私たちは前にもしたように、物語のこの章にも「更に一人」という題名をつけられそうであるが、しかし讀者は前の時のように精神的及び教育的混亂の張本人が一人また登場したなどと心配されるには及ばない。いな、メネール・ペーペルコルンはこの世へ論理的混亂をもたらすような人物では決してなかった。追い追いと分るだろうが、とにかく彼はそれとは全く違った種類の人物であった。それにも拘わらずこの人物が私たちの主人公に深刻な混亂を經驗させたことは、これから物語るところによってもお分りになるであろう。

メネール・ペーペルコルンはマダム・ショーシャと同じ夕刻の汽車で「村」ステーションに著いて、同じ橇でベルクホーフへ乘りつけ、やはり彼女と一緒にレストランで夕食をしたのであった。單に同じ汽車で著いたというだけではなく、むしろ連れだってやって來たのであって、この關係はメネールが例えば食堂で一流ロシア人席に、しかも戻って來たショーシャ夫人の隣りに席を與えられたという扱いにも窺うことができた。醫者の席と向い合った席であって、いつか教員ポポフが烈しいいかがわしい發作さわぎを起こした席であった。さてこの御同伴はハンス・カストルプの豫期しないことだったので、善良な彼の心をかき亂した。顧問官からクラウディアが歸って來る日と時間のことはいつもの口調で聞かされていたのだった。「ねえ、カストルプ君、老青年」と彼は言った、「忠實に待った甲斐ありですよ。明後日の夕刻私たちの小猫がまたここへ忍びこんで來ます。私のところへ電報で知らせて來ました」。しかしショーシャ夫人が一人でないことについてはベーレンスは何も言わなかった。多分ベーレンスも彼女がペーペルコルンと一緒に來ること、お揃いで來ることは全然知らなかったのであろう。とにかくショーシャ夫人がお揃いで到著した次ぎの日、ハンス・カストルプにいくぶんそれを詰問された時、ベーレンスも驚いたという顏つきで言った。

「私も彼女がどこであの男を拾って來たかはお教えできません」と彼は明言した、「とにかく旅先で知り合ったには違いありません、察するにピレネー山脈あたりで知り合ったんでしょう。そうです、あの男のことは貴方も諦めるんですね、夢破れし戀の奴隷、くよくよしても詮方なしです。二人はなんでも深刻な間柄らしいんです。旅の費用も共同會計らしいんですからね。いろいろの話から察するに、彼は大した金滿家で、それに隱居したコーヒー王なんです、どうです、貴方。マレー人の侍僕を從えて、豪奢な生活ぶりなんです。しかし彼はここへ遊山に來たのじゃ決してありません。ひどいアルコール性粘液過多の他に、惡性な熱帶熱にかかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com